

農家民宿の可能性

皆さんは、「農家民宿」をご存知でしょうか？

農家民宿とは、農家の方が営む民宿のことです。野菜の収穫などの農業体験ができるものをいい、開業するには旅館業法に基づく許可が必要となります。二本松市内では、平成24年に東和地域で初めて開業され、今では東和地域と岩代地域に合わせ23軒の農家民宿があります。

なぜ農家民宿を始めたのか？

東和地域で始まった農家民宿は、もともとは都会の子どもたちを夏休みなどに受け入れ、農作業などを通して田舎の良さを知ってもらうために始めた交流事業がきっかけでした。たかさんの都会の子どもたちが東和地域を訪れるようになり、農家民宿を正式に立ち上げようとした矢先に、東日本大震災と福島第一原子力発電所事故が起こります。

震災の影響により、農家民宿のスタートを1年遅らせ平成24年から開始しましたが、風評被害により子どもた

ちが訪れる機会が減り、代わりに放射能を調査・研究する学生や学者が宿泊するようになります。震災から7年が経過した今、ようやく本来の目的であった子どもたちや一般の宿泊者が戻り始めてきています。

なぜ農家民宿に人は来るのか？

ここに住んでいる私たちにとっては、昔から変わらぬ風景と土地であり、そこに暮らす人々もまた、昔からのなじみで、とり立てて大きな魅力はないと感じてしまいがちです。しかし今、都会の人々は「日本の田舎の原風景や自然を肌で感じたい。」という強い憧れを抱いている方が多いようです。農家民宿にはリピーターも多く、近年では海外からのお客さまも増えてきています。

日本には東京や京都など、観光スポットがたくさんあるのに、なぜこの田舎にお金を出して泊まりに来てくれるのか。

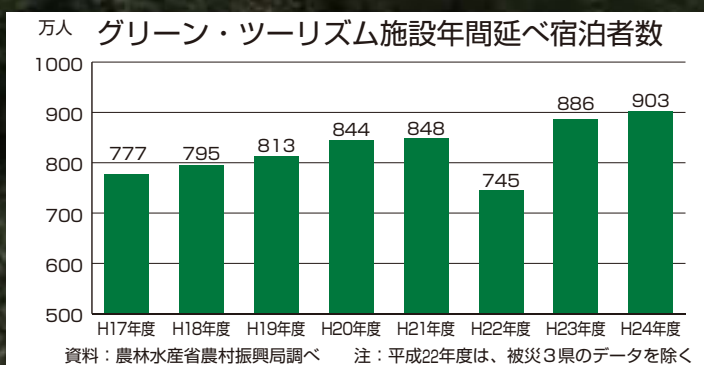
農家民宿は、これからも需要があるのか？

今月号では、市内で農家民宿を営む2軒を紹介しながら、農家民宿の可能性について探ります。

二本松市内の農家民宿数と宿泊者数の推移

	H24.4月	H25.4.1	H26.4.1	H26.12.31	H27.12.31	H28.12.31	H29.12.31
農家民宿数	7軒	9軒	14軒	16軒	16軒	22軒	23軒
宿泊者数	13人	495人	1,397人	918人	794人	1,265人	1,625人

※市内の農家民宿数と宿泊者数の調査対象期間は基本的には1年間だが、平成26年から調査基準日を12月末現在に変更したことにより、H26.12.31の宿泊者数のみ、9カ月間の人数。



※グリーン・ツーリズムとは…農山漁村において農家民宿や観光農園など、自然・文化・農林漁業とのふれ合いや人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動。ヨーロッパ諸国では、既に国民の間にグリーン・ツーリズムが定着しており、緑豊かな農山漁村が育んできた自然・生活・文化ストックを広く都市の人々に開放し、これら市民が「ゆとり」や「やすらぎ」のある人間性豊かな農山漁村での余暇活動を楽しんでいる。

農家民宿ゆんた = 戸沢 =



ただゆっくり、自然に癒やされ、
その人なりに楽しんでほしい



1



2



3



4



5



7



8



9

1_写真左から、「農家民宿ゆんた」のオーナー・仲里さん、東京から宿泊してきた黄(ファン)さんと新川さん。3人はこの日が初対面だったが、夕食後にお酒を飲みながら、いろいろな話で盛り上がる 2_近くの「東和サルスベリ園」から景色を眺める 3人 3_二本松駅でお出迎え 4_月がきれいだったこの日。黄さんと新川さんは、民宿の前で夜空を眺める 5_民宿のあちこちに、オシャレな小物がさりげなく置いてある 6_玄関を入るとすぐにお目見えする囲炉裏と鉄瓶 7_民宿の入り口にたつ看板 8_初めての野菜の収穫に挑む黄さん 9_民宿の周りを散歩中、サルスベリ園の大槻さんから柿のおすそ分け。3人は柿を食べながら民宿へ戻る



「農家民宿ゆんた」オーナー

なかさとしのぶ
仲里 忍 さん(45歳)

沖縄県北大東島で生まれ、小学生のときに父親の出身地である八重山の石垣島に移り住む。高校を卒業後、大阪の専門学校で建築や製図などを2年間学び、その後、派遣社員として各地で勤務する。沖縄出身の仲里さんは、東京に住む憧れがあったため、派遣期間終了後、東京や神奈川で数年間仕事をしながら生活していたが、実際に住んでみると住みづらさを感じ始めた。そのころから就農への夢を持つようになり場所を探していたところ、ある雑誌で東和地域で行っていた農業研修制度を知る。平成20年に東和地域で半年間農業研修をしたのち、現在農家民宿を営む家と畑を借りて本格的に農業を始める。平成25年から始めた農家民宿「ゆんた」の名前は、沖縄を代表する民謡「安里屋ユンタ」から付けたもので、築100年の古民家を生かした囲炉裏や薪ストーブ、趣のあるインテリアは、仲里さんのおもてなしの心からの癒やしの空間。お子さんのいる家族や幅広い年齢層、また海外からのお客さまも近年では多い。

自分が移住者だからこそ、この地域の魅力が分かる

「農家民宿ゆんた」を営む仲里忍さんは、東和地域に移住する前は東京都などで生活していました。だからこそ、この土地にもともと住んでいた人が当たり前前に思っている風景などが、本

当はとても魅力的なものであることを肌で感じています。大都市には無い静けさがあり、都会の人にとっては周りを散歩するだけでも楽しく、以前宿泊された方々は、あちこちに生育している食せる山野草の多さに驚いていたそうです。移住者だからこそ、この地域の魅力をナチュラルに引き出し、お客さまに伝えることができているのかもしれない。

テレビが無くて、宿泊してくれる方からたくさん情報がもらえる

「農家民宿ゆんた」では、基本的にテレビを置いていません。仲里さんの情報の収集元となるのが、宿泊されるお客さまとの会話です。「農家民宿にはいろいろな地域から泊まりに来てくれて、一緒に農作業をしたりご飯を食べたりしながら、多様なものの考え方や地域の話が聞けます。自分が経験したことのないことを疑似体験できて、自分の世界が広がるんです。お客さまとのコミュニケーションが、農家民宿を営む魅力のひとつです。」と仲里さんは笑顔で教えてくださいました。実際に取材してい

広がる夢

でも、お客さまと仲里さんの間で会話が途切れることがなく、テレビが無いことに不便さを感じることがありませんでした。

移住して10年。すっかりこの地に根付いている仲里さんに、これからこの民宿をどうしていきたいかをお聞きしました。

「東和地域は山間地帯。地元の方には、それを不便と感じる人もいます。しかし、私のようにこの地に移住してくる人間や農家民宿を訪れるお客さまは、不便さよりも、その山々の景色を魅力に感じて来ています。そういった環境の中で、あまりお金は掛けられません。自然を楽しめるようなデッキを作ったり、ピザ窯なんかも作って、自然の豊かさをたくさん感じながら、この民宿で1日中楽しめるようにしていきたいです。また農家の冬場は閑散期で、昔の人は竹籠や草履を作っていました。この技を継承する人が減っています。できればこの技を受け継ぎ、宿泊してくれるお客さまと一緒に、竹籠や草履を作る体験会などもしていきたいです。」

Interview



ファン ジーチェン
黄 基城さん(台湾出身)

東京での仕事のことを忘れ、とてもリラックスできました

私は台湾の台北出身で、仕事はソフトウェアをしています。もともと日本の文化が好きだったため、今から1年前、海外でいろいろな経験を積みたいと思い東京の会社へ就職しました。「農家民宿ゆんた」を知ったのはインターネットからです。山の中にある宿の神秘さと、仲里さんのやさしそうな笑顔に惹かれ、「ここだ!」と決めました。実際に来てみると、周りの雰囲気がゆったりしていて気分がとても楽になり、建物が多くいつも忙しそうな都会では絶対に味わえない気持ちになれました。一緒に野菜を収穫したり、採りたての野菜をその場で食べたり、みんなで料理をして食べたりと、全てが日本に来て初めての体験でとてもうれしく、新鮮でした。今度はぜひ、台湾の友達を連れてまた泊まりに来ます。



「農家民宿くまさん」の脇にある作業小屋で、採りたてのリンゴの大きさを確認しながら箱詰めする選果作業の様子。写真の左から2番目と4番目が、民宿を営む熊谷さんご夫婦で、左端が息子の耕平さん、左から3番目は、この日宿泊に来ていた大宮さん

里山の美しい景観を、 これからも残していきたい



農家民宿くまさん

= 戸沢 =



以前は稲作も行っていましたが、現在はリンゴ・サクランボ・ブドウなどの果樹栽培に絞って農業を営む熊谷家。畑でつくるおいしい野菜は、耕一さんのご両親が主に作られている

農家民宿をはじめた理由

熊谷耕一さんが「農家民宿くまさん」を始めたきっかけは、都会の子どもたちに東和地域に来てもらい、農業に親しんでもらいたいという思いからでした。平成23年からオープンしようと思っていた矢先に起きたのが、東日本大震災と福島第一原子力発電所事故。オープンを翌年に先送りせざるを得なくなりました。平成24年に東和地域で始まった農家民宿の数は、「くまさん」を含めて7軒でしたが、現在では23軒にまで増えており、昨年1年間の市内全部の農家民宿宿泊者数は1625人でした。

生まれ育った地域のために

東和地域の農家民宿の宿泊料は統一されており、旅行代理店などを使わず直接申し込むと、1泊2食付きで6480円(消費税込み)。他の地域に比べても安い料金設定です。熊谷さんは、お金を考えたなら農家民宿はやっていなかったと言います。生まれ育った地元に残っている者だからこそ、この地域の景観を守り残すため、そしてこの地域を元気にするため、民宿をやっており、それが自分の



「農家民宿くまさん」オーナー

くまがい こういち
熊谷 耕一 さん(63歳)
やよい
弥生 さん(61歳)

結婚して37年目になる熊谷耕一さんと弥生さんご夫婦。耕一さんは高校を卒業後、2年間ほど民間企業で働いていたが、長男だったため家業の農業を継ぐ。現在は本業の果樹農家の他、NPO法人ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会の理事長や、ふくしま農家の夢ワインなどにも携わっており、忙しい日々を送っている。平成24年に農家民宿を始めてから6年目。「以前は男子厨房に入らずを貫いていた夫でしたが、民宿を始めてからは、食事の片付けなどを手伝ってくれるようになりました」と弥生さん。一方の耕一さんは「お客さまが来ることで、家の中が前よりきれいになった」とおっしゃっていました(笑)。民宿を始めたことで、家の中での会話が以前より増え明るくなったという熊谷家。現在は息子の耕平さんが家業を継いでおり、ますます張り切ってお二人でした。

責任だと思っています。
年を追うごとに、地元愛が深まってきている

熊谷さんが若いころは、今ほど地元に対する思いが強くは無かったといいますが、年を追うごとに、地元への思いが強まっているといえます。特に里山に住む人間はせつば詰まっているといえます。人が減り、何もしなければ衰退してしまうと考えている里山の人は、『何もやらないよりは、やっけて失敗したほうが良い。そのためには、地域を巻き込んで前に進むしかない』と考えています。

子孫のためにも、里山の風景を残していきたい

東和地域の農家民宿立ち上げメンバーであった熊谷さんに、この地域で農家民宿が果たす役割についてお聞きしました。

「仕方ないことだけど、この辺りでも農業を辞める人が増えている、耕作放棄地が増え、景観が乱れ始めてきている。俺たちが農家民宿をやることにより、外から来る人が増えることで、地域のみんなが景観を元のように良くしようと思って行動するようになれば、昔の里山の景色

が戻ってくると思う。また福島県外の人に泊まってもらうことで、風評払拭にもつながると思っている。原発事故後、福島県内で生産される米や野菜、果物などは、他県には無い細かいチェックをして出荷されている。しかし、風評被害がいまだに存在するのは事実。行政機関や生産者がいくら大丈夫だよと外にアピールしてもなくならない。それよりも、外国人の宿泊者も増加してきている今、農家民宿に泊まってくれた人に地元産の野菜や果物を提供し、食べても

らうことで、福島県のもものは安全でおいしいということをお口コミで広めてもらったほうが、効果大きい。実際うちに泊まってくれた人たちも、友人や家族に伝えてくれ、その人たちがまた泊まりに来てくれたりしている。俺の場合は家業の後継者も育ってきたので、子孫のためにも、この地域の景観を守ってきたい。」



民宿くまさんオリジナルのワイン



1

2



3

4

1_弥生さんお手製の料理。郷土料理「いかにんじん」と「ざくざく」は欠かせない 2_弥生さん直筆のレシピノート。宿泊されるお客さまのアレルギーなど、食事が一番気を使っている 3_台所で弥生さんとお客さまの大宮さんが、まるで親子のような会話を交わす 4_耕一さんとお客さまの恒例の晩酌。この日は深夜までお酒を飲み交わし語り合った



NPO法人ふるさと
回帰支援センター
(福島県移住相談員)

おおみや みさき
大宮 美咲 さん

福島市出身。東日本大震災が起こり、福島のために何かしたいと思い、現在の仕事に就く。今回は、福島県で行う「こらんしょ農家民宿・里山の魅力向上事業モニターツアー」のアドバイザーとして、「農家民宿くまさん」に宿泊した。

都会の人にとって、農家民宿はすごく魅力があります

私は現在、東京で福島県へ移住を考えている方へアドバイスをする仕事をしています。相談に来られる方の中には、農業未経験者で就農を考えている方も多く、そのような方にはいつも農家民宿を勧めています。学校では教えてもらえないことを、その道の第一人者である農家さんから直接教えてもらい、宿泊することで、田舎の暮らし全体を肌で体験できるからです。こんな職業体験は他に無いと思っています。

私が初めて東和地域の農家民宿へ泊まったとき、なぜか昔からこの地域に住んでいて、実家に帰ってきたような感覚になりました。それはおそらく、この土地の景色と地域の人たちの温かさがそう思わせてくれたのだと思います。東和地域の農家民宿に泊まるたびに、地域の皆さんから家族のように受け入れていただき、パワーをもらって東京へ帰っています。

テーマパークなどで非日常空間が味わえるのと同じで、都会の人にとって農家民宿は、心が癒やされる非日常空間です。そして新鮮な農産物も都会には無い魅力です。私もそうでしたが、農家民宿へ泊まって初めて、野菜の本来のおいしさに気付くという都会の人がたくさんいます。農家の生活や農業の仕事を直接見て、体験できて、収穫したての農作物を、その地域に伝わる一番おいしい食べ方で食せる農家民宿は、都会の人にとっては非常に魅力を感じるものだと思います。

今、都市部では若い人を含めて、畑の耕作や家庭菜園をする人が増えています。作物を育てることに興味を持っているのです。東京に住んでいて思うことは、現在の若者は人との交流やかかわりを求めている人が多いということです。また東京に生まれた人は、田舎(ふる里)が欲しいという人も多いです。そういった都会の人にとって東和地域の農家民宿は、1度宿泊すれば必ずまた来たいと思うような、第2のふる里になるはず。インターネットなどで情報のほとんどを入手する現在、農家民宿の魅力や楽しみ方を上手に情報発信していけば、都会の人たちが旅行でホテルや旅館に泊まるのではなく、農家民宿へ泊まるといった選択肢を選ぶ人が多くなるのも、そう遠くないはず。

田舎が都会に勝るもの

田舎のごく普通の農家から、喜びの声が湧き出てくる。「食べ物がおいしい」「景色が最高」「また泊まりに来ます」。宿泊したお客さまから目を輝かせてそう言われると、地方の一都市に過ぎないと思っていたこのましが、本当はとて素敵な場所であるのだと気付かせてくれます。「都会には何でもそろっていて便利だ」。これは、地方で暮らす多くの人、特に若者の気持ちではないでしょうか。「田舎には何もない」と。便利さを求めるならば、地方は不便な土地かもしれません。しかし物質的な豊かさ

を求めるのではなく、精神的な人間本来の豊かさを求めるのであれば、悩みや晴れない気持ちをその包容力で受け入れ吹き飛ばしてくれる自然が目の前に広がり、人の温もりを感じることでできる田舎に、都会は勝てないのでは。不便な田舎の良さや素晴らしいさを改めて認識させてくれるのは、実は便利の良い都会に暮らす人たちだったのです。

農家民宿の可能性

農林水産省が発表する新規就農者数調査によると、ここ数年全国では、家族経営で子どもが農業を後継する人数が減る一方で、新たに農業を始める人が増

加しており、平成29年度に新たに農業に参入した49歳以下の人数は、調査を開始した平成19年以来最も多くなりました。

しかし就農を志す人にとって農業経営は、とてもハードルが高い職業だといわれています。基本的には自分の力であらゆることをしなければならぬため、漠然と農業がしたいと思っても、「何をどうすればいいのか」「収入は大丈夫なのか」といったいくつもの不安がつきまとうからです。こうした人にとって農家民宿は、農業を間近で肌で感じることで、農業という職業のハードルを低くしてくれる場でもあり、農業という職業の入

り口として一番適したものに成り得るのだと思います。

現在、農耕地の多い地方では、農家の子どもが農業以外の仕事に就くという農業の後継者不足に悩まされており、耕作放棄地が増えているのが実情です。そうした状況の中で新規就農者の増加というのは、耕作放棄地を減らし、今までの美しい農村の景観を維持する上でも非常に期待の持てる要素です。

農家民宿は、自分たちの住むこのまちの良さを再認識させてくれるとともに、新規就農者を増やして地域を元気にし、まちの景観を維持していくための重要な役割を担っているのかもしれない。